氏名：満原　健

西田幾多郎は、『働くものから見るものへ』（1927 年）で「場所」の立場に立って以降、あらゆる哲学上の問題をこの立場から説明しようと試みる。本論文は、西田が到達したこの「場所」の立場が成立するまでの思想の発展を考察することを通して、西田哲学の根幹をなすこの「場所」の立場の意義を明らかにした。

この「場所」の立場の意義のありかを論じた先行研究は数多いが、西田哲学の下地をなしている当時の思潮に目が向けられたことはなく、本論文ではそれに対して、当時影響力をもっていたヴントや新カント派、フッサールの哲学を参照し、それらについての理解にもとづいて、西田哲学の解釈をすすめていく。

そのなかでも特に着目するのは、フッサールの哲学である。フッサール（1859-1938）は西田（1870-1945）とほぼ同じ時代を生きた哲学者であり、多くの共通点を持っている。まず、両者はともに、はじめに心理主義的な著作を執筆したが、その後は心理主義に批判的な超越論主義へと陣営を変えている。また、フッサールが『論理学研究』や『イデーン I』で取り組んだイデア的なもの、超時間的なものはどのようにして認識可能になるのかという問題に、西田も『自覚に於ける直観と反省』や『働くものから見るものへ』で答えを与えようと格闘している。思想内容についても、主観と客観を相関関係にあるものとみなす点など、両者にはさまざまな共通点が見られる。西田とこれほど多くの共通点をもつ哲学者は、他にいない。西田哲学の独自性とその意義は、フッサール哲学との対比を通してはじめて明らかにすることができるのである。

本論第 1 部では、西田とフッサールの最初の著作がともに心理主義的なものであったということ、その後両者がその脱却を目指していたことを明らかにした。まず第 1 章では、哲学が没落し代わりに自然科学が信頼を得ていく時代を生きていたブレンターノとヴントは、科学化が進んだ心理学に着目し、これに哲学を基礎づけることで、哲学に対する信頼を再獲得しようとした、ということを示した。

第 2 章では、フッサールと西田がその最初の著作で心理学から受けた影響を明らかにした。フッサールはブレンターノから影響を受けて、『算術の哲学』で数学の基礎を心的作用に求めた。一方西田はヴントの影響下に『善の研究』を著した。その『善の研究』とヴントの哲学は、存在論的にはどちらも観念論、主意主義、活動説であり、認識論上の立場に関しては、主客分離以前の経験を正しい認識が成立している状態としている点で共通しているが、純粋経験を唯一の者の自発自展という形式で活動するものと主張している点で、西田はヴントと異なっているのである。

第 3 章では、フッサールと西田が採用することになった心理主義に対する批判を扱った。フッサールは『算術の哲学』執筆後、主にボルツァーノとロッツェの研究をすることにより、心理主義の問題点に気づく。イデア的なものの基礎を実在的なものに求めることはできないと考えるようになるのである。19 世紀終わりごろには、特にロッツェの影響を受けた新カント派が同様の批判をするようになっており、心理主義と超越論主義もしくは論理主義が対立するようになっていた。

続く第４章では、これらの新カント派とフッサールによる心理主義批判に触れた西田がどのように応答したかということを明らかにした。『善の研究』は、あらゆる知識の基礎、真理の基準が純粋経験にあると主張している点で心理主義的だが、西田は『善の研究』を擁護して、自分の立場は超越論主義である、『善の研究』を心理主義的とみなすのは誤解にもとづいていると主張している。それにもかかわらず、西田は『善の研究』から見解を変え、知識の基礎は経験を統一するアプリオリにあると主張し、自分の立場が超越論主義であることを明示するようになっている。ただし、この時期の西田は心理主義批判を誤解しているため、まだ心理主義を克服できてはいない。

第２部では、超越論主義を採用したフッサールと西田がともに、超時間的なものと時間的なものはどのようにして結合するのか、超時間的なものはどのようにして認識可能になるのかという問題に取り組んだということを論じた。第５章では『論理学研究』から『イデーンI』までのフッサールの著作で、この問題が主題になっているということを指摘した。すなわち、『論理学研究』では第二巻で、その超時間的なものがどのようにして認識可能なのかという問題が扱われ、カテゴリー直観あるいは一般者の直観によってそれらは認識されると結論づけられている。『イデーンI』では、超越論的意識のアプリオリな構造を分析した結果、超時間的なものは本質直観によって認識される、しかもその超時間的なものは原本が十全に与えられているので存在するものとみなせる、と主張されている。

第６章では、西田が『自覚に於ける直観と反省』で採った自覚の立場が『善の研究』の純粋経験の立場からどのように変わったのか論じた。すなわち自覚の立場では、超越論的自我の自覚にすべての知識の基礎があると考えられており、この点で超越論主義へと変わっていると言える。しかし同時に、自覚という概念は実在あるいは認識の形式としての唯一の者の自発自展を意味する言葉としても用いられており、この点では西田の哲学は変わっていないと考えることができる。

次の第７章では、西田が『自覚に於ける直観と反省』でフッサールと同じく、超時間的なものはどのようにして認識可能になるのかという問いを立てていることを示した。超時間的なものと時間的なものとの峻別を説いて心理主義批判をしたリッカートは、超時間的なものはどのようにして認識できるのかという問題は解決不可能だと主張している。それに対して西田はこの問題を解決することで、自分の哲学の正当性を主張しようとした。西田はおそらく気づいていないが、フッサールと同じ問題の解決を試みることになったのである。

他にも両者の共通点はある。西田にとって、超越論主義と論理主義の統合、認識の世界と体験の世界との結合という方向性で、フッサールは最先端を行く哲学者だった。そのフッサールの哲学は、現象学的還元を経たあとに開示される純粋意識と哲学的懐疑に耐える純粋経験が同一の事象を指していると解釈できる点、超時間的なものが意識に内在すると考えられている点、主観と客観が相関関係にあるとみなされている点などで、西田の哲学と共通している。そのため西田はフッサールの哲学を手掛かりとして問題の解決を目指したのである。

続く第８章では、超時間的なものはどのようにして認識可能になるのかという問題に、西田が『自覚に於ける直観と反省』でどのような答えを与えたか明らかにした。この問題についての西田は当初、超時間的なものと時間的なものは一つの実在の二つの契機として結合しているが、この実在が異なった見方で見られることで、超時間的なものが時間的なものとは無関係に独立しているものとみなされてしまう、というものであった。しかし、その二つの異なった見方がどのようにして結合されるのか、西田は自覚の立場からは答えを与えられなかった。そこで西田は自覚の立場から答えることをあきらめ、フッサールの哲学から手がかりを得て、複数の立場は絶対意志によって統一されると主張する。

しかしこの絶対意志の立場からの答えも、この問題についての完全な解決とはなっていない。絶対意志が超時間的なものであり、それが時間的なものも対象とするのであれば、なぜそのようなことが可能なのか、超時間的なものが時間的なものとどのようにして結合するのかという当初の問題が再び生じるのである。また、西田は以前と同じく時間という概念をリッカートらと異なる意味で使っていると考えられるため、絶対意志の立場が心理主義を克服しているとは言い切れない。

第３部では、どのような考えの変化を経て西田が場所の立場に立ったか、またその立場から心理主義の克服、超時間的なものと時間的なものとの結合の説明という二つの問題をどのように解決したのかということを明らかにした。第９章では、自覚の立場あるいは絶対意志の立場から場所の立場への移行を、論理的包摂関係による直観主義の論理的基礎づけして理解した。『働くものから見るものへ』の前編ではプロティノスの時間理解が受容され、意志作用は時間的で、その背後に超時間的な直観する場所としての主観があると理解されるようになった。後編では、この考えに論理的包摂関係が適用されそれが拡張されることで、意識と対象も一般者と特殊という関係にあるものとみなされるようになる。西田はさらに『一般者の自覚的体系』で、その意識を論理的包摂関係の極限にあるものとしての超越的述語面と、その基礎にあるものとしての知的直観の一般者とに区別し、意志作用を超越的述語面に於いてあるもの、超時間的な直観する場所としての主観を知的直観の一般者として捉えなおした。それによって直観主義の論理的基礎づけが達成されたのである。

第 10 章では、西田はこの場所の立場の超越論主義で心理主義を克服し、また超時間的なものと時間的なものとの結合を説明できたということを論じた。場所の立場で西田は、リッカートらと同じく変化するものを時間的なものと理解するようになり、超越論的主観は時間的な作用と異なる場所としての知的直観の一般者、認識の形式は論理的包摂関係に基礎をもつ一般者の自己限定だと考えられるようになり、アプリオリな知識はその知的直観の一般者の自己限定に基礎をもつと主張されるようになった。このように主張する西田の場所の立場は、論理的包摂関係にアプリオリな知識を基礎づける超越論主義であり、心理主義を克服していると言えるのである。

また場所の立場の西田は、論理的包摂関係を拡張して、意識を無と規定した。超越論的主観は真の無という一般者、通常の意味での一般概念によって規定できないものが於いてある

場所として捉えられ、そこに時間的な作用としての意識と、超時間的な対象という互いに矛盾するものが於いてあるとした。超時間的なものと時間的なものは、この真の無としての意識によって媒介され関係づけられていると主張したのである。このように西田は場所の立場に立ち二つの問題に答えることで、西田はリッカートらに反論し自身の立場を維持することができた。西田にとっての場所の立場の意義はここにあると言える。

最後の第 11 章では、1920 年代の西田によるフッサール批判の検討を通して、フッサールに対する西田の場所の立場の超越論主義の意義を明らかにした。すなわち、意識が志向性をもつということは真の無の場所が可能にしていると考える西田からすれば、志向性によって超時間的なものと時間的なものが結びつくと主張するフッサールの現象学は、不十分なものにとどまっていることになる。一方フッサールからすれば、拡張された論理的包摂関係にもとづく西田の議論は、原本的に与える直観に認識の正当性があるというすべての原理中の原理に従っておらず、説得力が不十分になってしまっていると言える。しかしその西田の思索は、まさに原理中の原理から外れているがために、真の無の場所という対象として現れず現象学が扱うことが困難な超越論的主観を、議論の俎上に載せる可能性を示している。ここに、フッサールの超越論的現象学に対する西田の場所の立場の超越論主義の意義を認めることができるのである。

以上の議論から明らかなように、西田とフッサールは、その時代背景、採用した立場、取り組んだ問題、その哲学の内容において、多くの点で共通点をもっている。そのフッサールの超越論的現象学に対する西田の場所の立場の超越論哲学は、論理的包摂関係を客観と主観との関係へと拡張し、超越論的主観を真の無の場所と規定したところに最大の特徴がある。西田の思索は、その超越論的主観という対象として現れず現象学が扱うことが困難なものを、論理的に解明する可能性を示しているのである。